特集 2
プロジェクト創生企画
国際日本文化研究学術交流会「武田泰淳と上海」

はじめに

西　成彦

郭偉さんをご紹介します。郭偉さんは昨年まで立命館で3年間，中国語を教えてこられ，現在は早稲田大学を拠点にして研究中でいらっしゃいますが，言文研の客員研究員として今なお立命館時代のつながりをたいせつにしてくださっています。そこでこのたびはプロジェクト創生企画「国際日本文化研究学術交流会」と銘打って，郭偉さんを核とした研究会を開催させていただくことになりました。

司会をつとめさせていただく私は，比較文学を研究しておりまして，ポーランド文学，ユダヤ人の文学を研究の中心にすえておりますが，ここ5，6年，日本文学を考える時，「ディアスポラ」という観点から新しいものが出てこないか，少しずつ考えるようになりました。日本の植民地支配，軍事戦略に連動して，日本周辺地域に日本人が進出していき，またそこで非日本人と接触する中で膨大な文学作品が書かれ，また非日本人が日本語で書くという形も新しく生まれていきましたが，これら植民地主義時代の日本文学に対する関心が，この10年あまり急速に，それこそ遅れを取り戻そうとするかのような進境著しい盛り上がりを見せているわけです。さらにたまたま3年前，ブラジルに行く機会があったものですから，ブラジルに行った日本人たちの文学については，これら旧植民地地域の文学を考えるポスト・コロニアルというものとちょっと違った水準を設定した上でないといけないなと考えているところでして，ふと「ディアスポラ」という言葉に可能性を見たのです。この角度から考えるならば，単なる植民地主義，植民帝国の権威をカサに着た，植民地主義の軍事的治安的，保護のもとで活動していた日本人だけでなく，日本の外に，ある意味で棄てられた，はじき飛ばされた日本人も含めてディアスポラというものがとらえられるのではないかと考えたわけです。その時，「上海」という場所は，その両方――日本人の植民者性と放浪者性――が被さっているような場所だということで，かねがね注目しており，今日の司会をつとめさせていただくこととなった次第です。

ここでもう一つだけ申し上げておくと「ディアスポラ」の捉え方には難しいところがあって，もともとはユダヤ人のディアスポラだけを指し示していたギリシャ語が元なのですが，この2，30年くらいでしょうか，アフリカ系のディアスポラであったり，あるいはさらにはヨーロッパ人の植民地主義の拡張に伴う人間の移動も含めてディアスポラという概念が浮上してきています。しかしそのときに，地球上の人間の移動を何もかも一緒くたにすることに対する批判も常に覚悟しておかなければいけません。言文研では2年前「コリアン・ディアスポラ」という連続講座を開きました。韓国の内外ではすでにディアスポラという言葉は，ある程度，共有されており，朝鮮半島の外に住むコリアンについて「コリアン・ディアスポラ」という言葉を用いることは定着しつつあるようですが，同じ言葉を日本人に対しても使ってしまうのは「これは

おかしい。コリアンの視点からすれば日本人がコリアン・ディアスポラを促した張本人なんだからジャパニーズ・ディアスポラという言葉を作って植民地主義的責任を回避するのは誤りではないか」という意見が出てきたりするわけですが，そういう批判も覚悟しつつ，去年の連続講座では「ジャパニーズ・ディアスポラ」という言葉をあえて使いました。ディアスポラをどうとらえるかという問題は，常に答えがなくて，これからも試行錯誤をつづけながら，概念としてのそれを磨いていくしかないと考えています。

とりあえず僕自身がディアスポラという言葉でとらえていることを申し上げますと，それは決して単独の移動，漂流とは違うだろうということです。あるエスニシティ，文化をある程度背負った人間が遠く離れた場所に越境していって，そこで他者と出会うだけではなく，同類とも出会う。必ずしも境遇を共にするわけではない別の日本人に出会う。ユダヤ人が別のユダヤ人に出会う。そういう中で同じ民族としての親近性を感じつつも，自分たちは別の経路をたどってきた，別のルートをたどってブラジルならブラジルにやってきた，上海にやってきた,「同じ日本人じゃないか」ということが自明ではなくて「同じ日本人なのに，どうしてこれだけ俺たちは違う経験をしているのだ」，こういう経験の蓄積からなっているのがディアスポラの一つの意味だと思うのです。

さらに，流れ流れて異郷の地に渡った人間は,同じオリジンやルーツ，根っこを持つわけではないが,しかし同じくディアスポラを生きている人とも出会うのです。上海に行った日本人は，そこで上海人にだけ会ったわけではなく，上海にやってきている別のディアスポラの民とも出会う。武田泰淳や堀田善衛のケースはまさにこそのことをかんがえさせてくれます。自分が国を失って，ディアスポラになったと思った時に，自分たちはあのユダヤ人と同じになったと思ったりするわけです。それがディアスポラのもう一つの意味で，ディアスポラの民はナショナルなものに傾斜してしまう傾向が多々あるにもかかわらず，全く違った歴史的な経験を踏まえてきた諸民族と自分との間に非常に近いものを感じる可能性をも含んでいる,これがディアスポラの持つ意味ではないかと思います。

いろんなディアスポラを考える上で「上海」というのはこれまでも大きく注目されてきた場所ですし，今日のディスカッションの中でも深めていきたいと思いますが，かつて上海というのはどういう都市であったのか，それが今，どんなふうになっているかというところまで含めて議論ができればと思います。今日の研究会の開催が実現する前にそういう経緯があったことをご理解していただいたところで，さあ始めたいと思います。郭さん，お願いします。